

2022

10月

ゆ  
う  
ひ  
ろ  
ば

遊通信

第 184 号



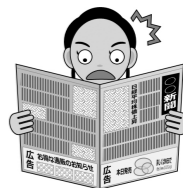
安倍元首相の「国葬」に異議ありスタンディング（JR札幌駅南口前）

**特集** 市民と新聞（メディア）

講座「新聞がなくなる!？」を通して見えたこと	・・・ 2
地域課題は日本の課題に通ずる	・・・ 4
若者の情報収集について	・・・ 5
私と新聞	・・・ 6
電力の必要量が拡大の一途をたどっていく社会に未来はあるのか!?	・・・ 8
「新聞がなくなる!？」講座参加者の声	・・・ 9

**小特集** 市民に支えられた「反国葬」  
— 講演会、要請、スタンディング

「声」はだれでもあげられる	・・・ 10
「反国葬」から政治の転換への歩みを進めよう	・・・ 14
インターンとして「遊」に参加してみた	・・・ 15
あどぼのプラットフォーム会議 2022 北海道開催	・・・ 16
北海道メジャーグループ・プロジェクト 2022 キックオフ報告	・・・ 18
連載 タント アナクネ ビリカ（第3回）	・・・ 19
連載 フィールドワークな日々（第90回）	・・・ 20
リレーエッセイ 私とさっぽろ自由学校「遊」（第3回）	・・・ 21
さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ など	・・・ 22



# 特集 市民と新聞 (メディア)

紙の新聞はあと数年で激減し、やがては姿を消すのではと言われている。江戸時代のかわら版を原型に発達し、長く市民生活の情報源としてなくてはならないものとされてきた新聞。情報のデジタル化の波の中でその存亡が問われている。今年度前期、遊では講座「新聞がなくなる？」が開講された。コロナ禍の中での久しぶりの対面講座であったが、予想以上の参加者があり、熱い話し合いがされた。講座を振り返ることで市民とメディアの在り方を問い直し、今後の展望を探りたい。

## 講座 「新聞がなくなる!」を通して見えたこと

雨宮 恭子

### 私と新聞

まだ、敗戦の色濃い一九五四年生まれの私は生粋の新聞っ子。「もう二度と戦争は嫌だ」という国民感情と戦後民主主義の気風の中で、新聞や雑誌・本に囲まれた子ども時代を送った。新聞はリベラルの象徴だった。

毎日学校から帰ると、家に転がっていた新聞を読んだ。読み終わると父が職場の読書サークルで回し読みしていた週刊朝日・文藝春秋等を拾い読みするのが常だった。

就職して一人暮らしを始めた時には真っ先に新聞の購読を申し込んだ。それから引越すたびに、ガス、水道、電気と共に新聞の解約と新たな申し込みの連絡が欠かされた。

何時頃からか気になる記事は切り抜くようになり、それは私の貴重な資料になった。なぜこの講座を企画したか

一昨年であったか「さよならテレビ」という映画の上映会で、若者がテレビを見なくなりテレビが先細りしているということを知った。その時主催者が、「テレビより新聞の方が先に姿を消すのではないか」と話していたことが印象

に残った。

その頃から「あと5年くらいで紙の新聞は姿を消すのではないか」という話を耳にするようになった。愛着がある新聞がなくなるとは大変という気持ちと、資本の論理で大事な情報収集の場を奪われていくのかという思い等が交差し、これは遊の講座で取り上げるべきだということになった。

### 新聞はほんとうになくなるのか

講座の中で、「新聞は本当になくなるのですか？」という質問があった。声に出さなくてもそう思っている人は少なくはないと思う。かくいう私もその一人であった。しかし、様々な統計等を使った資料を見ると、そう遠くない将来、紙の新聞は限りなくゼロに近い状況になっていく気がする。ある日突然始まったように思えた戦争が、そこに至るまでに着々と準備が進められていたように、ある日新聞が突然消えてしまう事態も、そこに至るまでの一歩一歩がある。その姿は見ようとしないと見えないうし、知ろうとしないとは知ることができない。それによって利益を得る人たちによって巧みに世の中は動か

されていく。

### 皆さんの熱い思いに助けられて

講座が始まる前、参加者が少なかったらどうしようかと不安だった。しかし第一回目の講座は事前に準備した資料が足りなくなるくらいに盛況であった。

話題提供者の迫力ある話しぶり。話に聞き入り質問する参加者の熱気。講座を企画してよかったと思った。新聞の果たしてきた役割の重さ、時代と共に変容してきた新聞に対する疑問や不信感、失望…、「このままではいけない。事実と向き合い突破口を見つけなければ。」という思い等、様々なものが皆を突き動かした。このような状況を作り出したのではないだろうか。

この講座を企画し実現するにあたり元新聞記者の山本伸夫さんに大変お世話になった。山本さんは構想も満足に持っていなかった私にたくさんアドバイスを下さり、お陰でなんとか講座を形にすることができた。その時に一番強く言ってくれたのが『市民の立場』で作る講座にすることが大切だ』ということだ。それで講座は市民の立場に軸足を置きながら多くの記者たちにも力を貸していただくと望ましい展開になった。

### 新聞の失墜と安倍元首相の狙撃事件

新聞は民主主義を守る一翼であった。しかし少しずつ変わってしまった。権力と対峙する存在であったはずなのに、いつの間にか権力に追随する存在へと変わってしまった気がする。そのことが表われたのが、今回の安倍元首相狙撃事件をめぐる報道であった。

ちょうど講座の第3回目が7/14だったため、話し合いの中でその話題が出された。選挙が終わるまで容疑者の供述にあった宗教団体の名が統一教会であることが伏せられ某宗教団体と報じられていた。それが何を意味するのか。「市民はどういう報道を求めているのか？」というストレートな問いかけがなされた。「選挙が終わるまで伏せておけ」という誰かの指示があったのか。または忖度かはたらいたのか…。

第4回目の講座(8/11)ではさらに報道の実態の内実が明らかになった。大手の新聞社の記者が某宗教団体「統一教会」であることを突き止め報道しようとしたところ、上部の反対に合つてかなわなかったと…。一社だけではなく日本中のほとんど全部の新聞が押しなべてその事実を報道しなかったと…。どこかからの圧力というより自主規制だったようだ。「これはまさに『新聞の終わりの始まり』ではないか。」と話題提供者の長谷川綾さんは語った。

### 今後に向けて

元新聞記者の飯島秀明さんが講座の中で「今後の展望を切り開くためには記者同士の横の連携や記者と市民の連携が大切」と話してくれたが、この講座自体がそのような場の第一歩になったことが何よりうれしい。たくさん市民と記者の皆さんが集まりいつも時間が足りなくなる位の熱い話し合いがされた。この流れをこれから大事にしていきたい。

利益優先の社会の流れの中、紙の新聞は姿を消そうとしている。報道のあり方も変わってきている。これは物言わず世の動きに流されている私たち市民の責任でもある。では何ができるのか。マスメディアに一人で抗議するのが大変なら、市民のネットワークを作って共同で抗議してもいいのではないか。市民メディアにチャレンジするのもよいと思う。(デジタルの危険性にも配慮しながら…)他にもアイデア次第で多彩な取り組みができるのではないだろうか。決して明るくないこの時代を生きていく世代に手渡すために、私たち市民も少しずつでも動いていきたい。新聞を含めたメディアにかかわるみなさんと共に歩んでいきたいと思う。

雨宮 恭子 (あまみや きょうこ)  
さっぽろ自由学校「遊」理事。馬鈴薯の後に植えた大根50本を漬け物にするのが楽しみ。

# 特集

## 地域課題は日本の課題に通ずる

山田香織

### ●記者の役割は伝えること

わたしは地元紙の記者をやめ、2018年3月に、「紙の街の小さな新聞社ひらく」を立ち上げました。月1回の発行でA4サイズ、24ページほどの媒体です。

記者になる前の10代〜20代前半は、政治に全く関心が無く、与党という政党があるのだと思っていただけ「政治に無関心な若者」だったと思います。11年ほど

れる行政からの情報を垂れ流していました。「ひらく」を始め、現場からの声を集め、課題をあぶり出し思考するスタイルに180度変わりました。それだけではいけないと思うのですが、ここに、これからの時代、新聞が生きていく活路があると考えています。現場は多様で、行政の説明との乖離がた

### ●地域課題あぶり出す

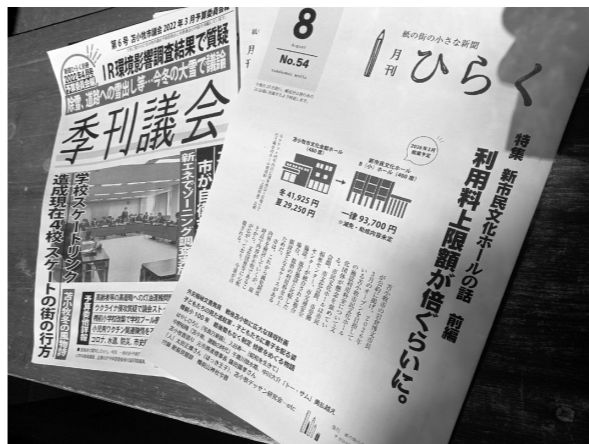
「地域の課題は、日本の課題につながる」ということも、より強く実感するようになりました。苦小牧で起きていることは、程度の差はあれ、全国各地で起きていることではないかと思えます。その背後には、国の法改正などの動きがある。だから、地域を考えるということは、日本の政治のありようを考えるという

ことにつながると思えます。それを伝えていくことが、記者の役割だと思いがち、日々、追い付かない知識で頭をフル回転させながら取材をしています。

●記者クラブ不要論  
先日、「遊」の講座でお話をさせていただきました。一つ印象的だったことがありました。「記者クラブをなくすべき」というご意見が出ていました。

私はなくすべきではないと思います。例えば、行政に説明責任をしっかりと果たしてもらった場の一つである毎月の定例記者会見は、記者クラブで要請して行われているものです。こうした場があることを大切にしていかなければならないと思いますし、私も、質問はできないオプザーバーという立場ではありませんが、そこに参加している者として、会見が定例で開かれるということの価値を読者の方に感じていただけたら、情報を伝えていかねばと改めて感じた次第です。このほかにも、さまざまな気付きを与えていただき、とても有意義な場となりました。このたびは、どうもありがとうございました。

山田香織（やまだかおり）  
紙の街の小さな新聞社ひらく 代表・記者



地域紙で記者を続けているうちに、「知る」ということが、権力を暴走させないために最も重要なことの一つだと考えるようになりました。多くの人に「知らせる」ことが、新聞記者の役割であると考えようになり、今では、強く感じています。

会社員記者だった時は、記者クラブに寄せら

# 特集

## 若者の情報収集について

佐藤碧

こんにちは。遊でスタッフをやっている佐藤です。2022年度前期の「新聞がなくなる」にて、大学生である私が若者の情報収集という観点から話題提供者としてお話をさせていただきました。

引つ張つてくると、昨年、新聞通信調査会によって行われた世論調査では、20代の約7割が新聞を読まないという回答が

まず、私たち（と言ってもサンプルは周囲の友人くらいのもですが）がどうやって日々の情報やニュースを集めているのかをお伝えすると、専らインターネットになります。Twitter、ネットニュース、ニュースアプリ等々、電波が通っていないと閲覧できない媒体で読んでいるので、新聞は読まない人が多いです。主観だ

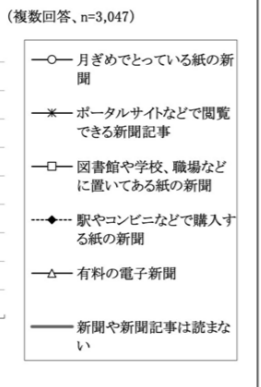


図 23-2 新聞の読み方 (性・年代別) (複数回答、n=3,047)

が新聞を読まないという回答が約8割が「テレビやインターネットなど他の情報で十分だから」と回答しています。こつこつとしたものを見ると、若者の情報収集はアナログからデジタルなものへと変わっているのだと思います。私も同様なので、あまり批判はできないのですが、こうして文章に起こしてみるとあまり良いことではないように感じます。という

も、デジタルの悪影響の一つに「情報の偏り」があります。インターネットには紙面の制限がないものですからニュースは調べればいくらか出てきます。しかし全てを読むなんてことは面倒くさいし出来っこない。結果、興味のあるカテゴリのニュースを拾い読みすることになるわけです。私の場合だと、スポーツ、経済の記事は比較的よく見ますが、政治の記事は正直あまり読んでいません。個人的に、新聞やテレビの良いところとして、誰もがカテゴリーの偏りなく、普遍的に世の中の情報を知ることがあると思っています。その性質を失うデジタルでの情報収集はその面ではマイナスだと言えるでしょう。

勿論、そういったマイナスを上回るだけの利便性があると若者は考えているわけです。具体的には、読む場所を問わない、無料で読めるなどがあります。しかし、それはデジタルな情報収集の方が優れているという意味ではありません。新聞離れが進む世の中で、これらの情報収集はどのような姿になっていくのか、皆さんはどうお考えでしょうか？

佐藤碧（さとうあおい）  
さっぽろ自由学校「遊」事務局員。北海道大学法学部3年生。

# 特集

## わたしと新聞

### 土肥 信子

#### 自分の立ち位置と新聞

スマホがない私は新聞を手にかざることから一日が始まる。私の立ち位置にとつて参考になる記事を読む。私の立ち位置とは子どもの世代へ読書や手仕事の楽しさを伝え、麦わら細工で道産品をつくること。

「新聞がなくなる!？」という講座名を見て思い浮かぶことがあった。三年前に130戸の集合住宅に移り住んだ頃は、早朝玄関のドア近くの床に一束厚さ20cmや10cmの朝刊がいくつも無造作に置かれていた。が、いつの間にかその束は姿を消した。新聞を定期購読する世帯が激減したのだ。情報がデジタル化される日が来て紙の新聞がなくなったら、スマホを持っていない私は取り残されるのだろうか。

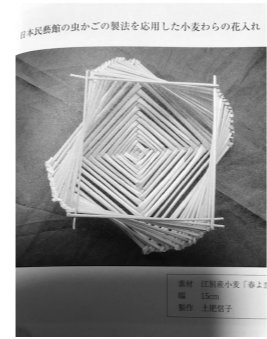
新聞はただニュースを知るだけでなく社会に目を向けていくためのきっかけを与えてくれる存在である。日々自分の視野が広がっていく思いにさせてくれる、なくてはならない存在だ。

しかし、新聞情報を鵜呑みにするのではな

く批判的にみることも大切である。「新聞がなくなる!？」講座の第5回目の中で小泉雅弘さんが市民メディアについてのレジュメにこう書かれている。「同調であれ、批判的であれ、情報ソースの多くは、政府や行政、警察側の情報である」と。同感だ。

政府や行政からの情報だけで紙面が埋められると、新聞の魅力が薄くなり、購読者の減少につながるのではないかと思う。例えば、2020年1月、新型コロナウイルス感染者発表以来、突然に一斉臨時休校。以来紙面はコロナ続きだった。休校しなければならぬ科学的根拠や感染症の研究者会議と学校現場の意向も分からない。分からないまま生活が激変したことに親子共々納得できなかったと思う。政府や行政側の情報だけでなくそのような市民の側の状況や

心情を新聞はどの程度報道できていたのだろうか。福島



の原発爆発の

発表の報道にもフィルターがかけられ、地元の人々は傷ついた。

**新聞に支援された市民活動**

1957年、札幌市立中央図書館の貸し出し文庫を始めました。地域の集団読書のため毎月100冊配本してもらえるので、近所の母親仲間の自宅茶の間を開放、高学年が紙芝居を17年間続けた。その仲間の広がりや地域の歴史の聴き取り、特産玉ねぎについての古老からの聴き取りにつながりました。親子体験農園も開き、現在の麦わら細工伝承へたり着きました。長く続ける間、新聞記者の方々も子ども達へあたたかい眼差しを向けて記事にして下さったことに対し、心から感謝申し上げます。

**情報の有無で変わる市民の暮らし**

コロナ自粛の中、家で過ごした同年代の友人3人は、最近歩きにくくなったと嘆いています。私は85歳ですが、ある本を読んだお陰でひきこもらずにすみ、健脚です。その本は『インフルエンザワクチンは打たないで』（母里啓子（もりひろこ）著）です。小学校の集団接種の犠牲者を出さない為に前橋市の医師会と周辺の医師会・母と子500組が協力し、

接種の効果を5年間調査した「前橋リポート」が掲載されています。3年前に出会えたこの本から得た情報は重要で、お陰で生活を変えずに過ごしています。情報は大切です。

3年前に50年近く住んだ家をたたみ転居しました。旧居のヨーロッパの野菊を捨てがたく、知人の空き地を借りて移植。花畑へ往復2時間かけて週3日通い、スギナやドクダミと格闘しました。

自粛化の集合住宅での孤独感は「コミカフェ加伊に救われました。「遊」の講座「老いと向き合う」で加伊を知りました。店主の若月さんが様々な出会いの場を提供し続けてくれ感謝しています。本の情報と加伊（林の中）のお陰で健康を保てました。また、毎朝3キロの散歩とその途中での新聞購入（私は新聞を定期購読せず、曜日ごとに読みたい記事が載っている新聞をお店で購入している）が私のもう一つの元気の秘訣かもしれません。

#### 新聞に報道して欲しいこと

これからの新聞に次のような報道をして下さることを望みます。

① 3・11以降福島から札幌へ避難されている方々とその裁判の経過。ウクライナばかりでなく地元のことも伝えていただきたい。

② オリンピック汚職について表面的な報道だけでなく、根本的構造的な原因をたどって記事にしていきたい。

③ 海外駐在員の方には、各国の幼児からの教育制度、職業教育、体験談なども含めて取材して記事にしていきたい。

④ 国内の支社勤務の方には、国立私立を問わず各地域の美術館、博物館、児童会館の様子を道民に紹介していただきたい。

#### 今後に向けて

これから次のようなことができればいいなと思っています。

① 図書館やコミュニティセンターに、地方紙コーナーの開設を!

図書室に全国各地の新聞社から5〜7紙日刊紙を送ってもらい地方紙コーナーを作る。

3・11後の河北新報や沖縄タイムス、桜の季節の南信州新聞を手にする、全国紙からは得られない視野の広がりを感じることができ。もし実現したら新聞に対する応援にもなるのではないか。

② 新聞に投書し自分の声を発表する。

そのことが新聞を支えることになるのではないか。そのためには日々修煉し苦手だった書くことを克服したい。



土肥 信子（どい のぶこ）  
さっぽろ自由学校「遊」にて「黄金色の手しごと」（麦わら細工）の講師をつとめる。  
2022年10月『麦わら細工に魅せられて』出版（「遊」で貸出できます）

# 特集

## 電力の必要量が拡大の一途をたどっていく 社会に未来はあるのか!?

若月 美緒子

「新聞がなくなる!」講座を受講し、新聞の読者が激減して地域の新聞販売店・トラック輸送業者など関連する仕事もほとんど縮小していることを知った。そして、ネット検索で情報を得るとは見方を変えたと、このような人の労働が電力に置き換えられていくということだと気づいた。

新聞だけでなく本も雑誌も減少していく昨今だが、すべての情報をネットに頼る時代になると電力消費はさらに増える訳で、原発の全廃など夢の夢になるのが怖い。そう考えて「クラウド・消費電力」でネット検索してみたら、こんな情報が手に入った。

クラウドの電力消費を増やしてきたのは、これまではAIと動画であった。今後これに、VR、自動運転、IoT（遠隔地からモノを管理・制御）等が加わる。「スマホの電力消費の99%はスマホの外のクラウドで発生している」「クラウドの分を含めれば、スマホ1台あたりの電力消費はじつは冷蔵庫1台よりも多い」という。自動運転車が導入されると、人間が介在せずにデー

々が集められ、それをAIが分析するようになる場面が増えるが、これによって、データの蓄積速度やAIの計算量がますます増大する。(新しいエネルギー多消費産業として「クラウド」を育てよう 20205・15 杉山大志より)

杉山さんは「日本に発電所とクラウドをどんどん増やすことで経済成長を」と考えている方のようだが、それは今日の経済界の方向なのだと思う。昨日も、テレビニュースで東京の山手線を自動運転(！)にする大規模訓練の様子を見たところだ。「将来の労働力不足に備えるため」とJRは説明していたが、これは無人運転を導入するための言い訳だろう。



巨大資本により、人が働く現場は否応(いやおう)なしにコンピュータ制御の装置に置き換わって

いく。それが資本主義の生き残りをかけた戦略なのだろう。インフラとしての巨大電力発電所の建設はそこに不可欠だ。一方で多くの人が仕事を失って路頭に迷い、遠く南米のブラジルの生息地がリチウム電池の供給地ゆえに破壊され、身近な石狩湾の巨大風力発電建設で健康被害におののく住民がいても、原発事故の被害がいかに悲惨でも、すべてが経済発展のかけ声によってかき消され、無視されていく。この現在の流れのどこをどう変えていけるのだろうか。(と書いて、上記の情報はネット検索で入手している私です)



若月美緒子(わかつきみおこ) さっぽろ自由学校「遊」会員・「コミカフェ加伊」店主

### 「新聞がなくなる!」講座参加者の声

○月刊「ひろく」を定期購読することにした。苦小牧の話題が中心だが学ぶべき点がある。ワールドニュースを見ている。日本の放送と突っ込み方が違う。小泉さんの話した小さな主語とは身近なコミュニケーションに根差した意見をまとめるということでは…。例えば乱暴な開発をやめさせるとか…。  
○本人訴訟と取材とは重なる。相手をどう引き出すか。

○情報に振り回されないようにしなければ…。見えないものを見、聞こえないものを聞く。歴史を勉強し情報を消費するのではなく自分の足で立つことが大切。この講座は参考になった。

○ニュースは何のためにあるのか。ジャーナリストとして大切にしているものは? 何のために伝えたいのか? 記者の人間性、品位を振り所にしているのか。社会の役に立とうと思っているのか?

○新聞の読者欄、社説を読まない。テレビのアナウンサーは報道人の端くれなのか、芸能人なのか。新聞は2紙取っているが無駄遣いかもしれない。もうちょっとどっかがんばって欲しい。

○オリンピックや国葬を止める方法はあるのか? 工夫しながらやるのが大切?

○今回の国葬のこと、どうしても我慢できない。紙の署名を集めている。

○何か深い話になって来た。インターネットは使わないようにしている。北海道新聞は介護のことをていねいに載せていると思う。

○新聞とテレビの違い、テレビは感情のメディア、新聞は論理のメディアと言われる。日本学術会議から学術をとると日本会議になってしまふ。日本ジャーナリスト会議からジャーナリストをとると日本会議になってしまふ。

○「批判しながら応援しよう!」がモットー。道新の紹介記事を見て遊の講座に出してみた。そこで初めて本当に自分が知りたいことを教えてくれる場所に出合えた。ある人に「新聞はつまらない。知りたいことが載っていない。」と言ったらブルジョア新聞だからと言われた。

○小泉さんの市民メディアについての資料は興味深かった。ただ、稼ぐことを目的にしないボランティアは持続性ということではどうなのか。収支が釣り合うことが続く仕事の条件と言われている。

内科・神経内科  
**札幌中央  
ファミリークリニック**  
外来一般診療  
月火木金9:00~11:30  
札幌市中央区南1条西11丁目  
ワンズ南一条ビル6F  
TEL. 272-3455

**自然食ホロ**  
札幌市東区中沼西  
5条2丁目3-16  
TEL: 887-6224  
いつも喜んで、  
感謝して。  
<http://holo.sunnyday.jp/>

いつだって No Nuke!  
北海道のエネルギーの未来を考える  
10,000人の会

Simple Life, High Thinking  
小4から高3まで  
**スコール ユウ**  
〒007-0866 札幌市東区伏古6条4丁目4-21  
TEL. 785-0228



参考資料1：北海道知事、札幌市長への要請書

安倍元首相の「国葬」に反対する私たちが北海道知事と札幌市長に9月12日に提出した要請案は安倍元首相の個人としての死を悼むことと、「国葬」とする問題は異なるという論理構成を取りました。以下は要約です。(山本)

一、国葬を定めた法律はなく、対象者の基準もあいまい。岸田首相は内閣府設置法を根拠としたが、法律家の間でも議論が分かれている。閉会中審査で、岸田首相は国葬対象者について「その都度、政府が総合的に判断するのがあるべき姿」と答弁し、政治の恣意性が入り込む余地すら示した。法に基づいて政治を進める立憲主義、民主主義に反する姿勢である。

一、岸田首相は「国葬」の理由について、安倍元首相の「卓越したリーダーシップと実行力」加えて厳しい内外情勢の中での「首相の重責」を挙げた。しかし、「アベ政治」は違憲の疑いの濃い安保法制を強行採決し、森友・加計学園問題や桜を見る会の疑惑を残したまま。桜を見る会に関してだけでも国会において118回もの虚偽答弁をした。公文書の改ざんなどを強いられて公務員が自死した痛ましい事実もある。アベノミクスも疑問符付きだ。「国葬」はアベ政治を一方的に評価し、それを市民に強制し、世論の分断を激化させると言わざるを得ない。

一、安倍元首相銃撃事件の背景にあげられる世界平和統一家庭連合(旧統一教会)は靈感商法はじめカルト的な要素を多く持っている。その旧統一教会と安倍元首相はじめ主に自民党との関係が取り沙汰されている。先の審査で岸田首相は安倍元首相についての調査には「限界がある」と極めて消極的だった。旧統一教会の解明抜きに「国葬」を行うことは、自民党が旧統一教会との関係を断つとした方針と矛盾するうえ、旧統一教会にお墨付きを与えることになると危惧される。

一、国の行事として行うことによって、公共機関、教育機関、施設などに半旗の掲揚や黙とうなど弔意を強制する雰囲気醸成しかねず、歌舞音曲の自粛などを求めることなどは個人の思想信条の自由に抵触し、憲法に違反する。

この上で、北海道知事と札幌市長には基本的に次の2点を要請し、回答を求めました。

- ① 公費による「国葬」出席は撤回すべきである。(札幌市長は要請時に出席を明かにした)
② 学校や庁舎での半旗掲揚、黙とうの指示などを出すべきでない。

表明してくれた団体は以下通り。
▽市民自治を創る会▽札幌地域労組▽戦争させない市民の風・北海道▽さっぽろ自由学校「遊」▽北海道労働組合総連合▽北海道ウイメンズユニオン▽護憲ネットワーク北海道▽医療9条の会・北海道▽女のスペース・おん▽カトリック札幌教区正義と平和協議会▽民主教育をすすめる道民連合▽I女性会議北海道▽北海道憲法共同センター▽自由法曹団北海道支部▽北海道

海道平和婦人会
講演会の入場料収入と合わせると講演会経費の見通しもつき、私たちの作業の限界もあり、賛同団体の要請を止めた。ところが、講演会に合わせるように個人カンパも相次ぎ、17000円にも上った。賛同・カンパの皆さまに、あらためてお礼を申し上げます。
ともあれ、こうして「安倍元首相『国葬』」に異議あり」講演会は9月6日、札幌市教育文

化会館小ホールで開かれた。火曜日、夜間の開催に関わらず、参加者は約180人。想定を大きく超える集まりだった。ユーモアを交えながらリスミカルに弁舌をふるった水島さんは最後に、「市民は政府の行動を厳しく監視する必要がある、市民の眼力が問われている」と熱く訴えた。(道新9月26日付け札幌市内版「はなし抄」に要旨掲載。講演会を前に開催のための打ち合わせと、講

小特集 市民に支えられた「反国葬」—講演会、要請、スタンディング

いわゆる「アベ政治」のひどさに対する市民の怒りの深さあらためて知った。安倍元首相「国葬」に反対した、この2か月間を振り返ると、こう言えるのではない。銃撃されて不慮の死を遂げた安倍晋三氏の人間個人としての死を悼まないわけではない。しかし、首相としての実績を考えると、哀悼の感情に溺れているわけにはいかなかった。そして今、眼前にあるのは「国葬」を強行し、旧統一協会問題で右往左往する岸田政権の無様さである。この政権を退陣に追い込む序章が、「反国葬」の運動だったかもしれない。

「声」はだれでもあげられる

山本伸夫

私たちが「反国葬」の運動を繰り広げたわけではない。札幌はじめ道内各地でこの1か月半、さまざまな市民運動が繰り広げられた。その一つとして、札幌の1市民グループの動きを記録するのが本稿だ。限られた時間の中、1テーマで何ができるかのスタディケースとして紹介したい。

7月8日の銃撃事件以降、数日にして「国葬」の話が出た。それと合わせて、東京で、国会周辺での「国葬反対」の動きも報道され、反対声明がネットで紹介されるようになった。集団的自衛権に道を開いた閣議決定、特定秘密保護法、そして安保法制の強行可決などを重ねてきた安倍政権に終始、反対してきた山口たかさんと私山本は「札幌でも何か声を挙げなくては。意思表示する場を設けられないか」と話していた。

賛同協力で水島朝穂講演
そんな7月下旬、早稲田大学大学院の憲法学専攻の、水島朝穂教授のホームページ「平和憲法のメッセージ」に「安倍元首相『国葬』はジョーク」なる刺激的な文が掲載された。ドイツでの「国葬」を紹介しながら、日本における「国葬」の歴史と憲法における問題点を考察していた。

「国葬」の問題点を整理し、考えるには、水島教授はうってつけの講演者に思えた。そこで1面識も紹介者もなかったが、講演依頼を申し込んだ。メールを重ねるうちに、9月初めにゼミ生のフィールドワークで来道する旨と、その機会に講演を受けて良いとの返信を得た。日程を調整し、講演会場を捜した。確定したのが8月6日。講演会のちょうど1か月前だった。歩きながら、イヤ、走りながら考えていたのは、①この講演会を札幌で「反国葬」のアクションを起こす契機にできないか②市民発意の「この指とまれ」方式でどこまで出来るかの2点。そして講演会開催に必要な資金確保にひねり出したのが、一口2000円で賛同団体を募ることだった。

賛同のお願い文、講演会お知らせのチラシ作成：賛同団体巡りを始めた矢先、山口さんはコロナに感染、山本も感染者との接触で自宅謹慎を余儀なくされ、しばらくは電話作戦となった。しかし、だ。安倍元首相「国葬」に反対する機運の高まりがあったせい、2週間ほどの間に、札幌市内の15団体が1口から5口で賛同してくれ、計59000円を計上できた。賛同を

演会後を企画する会議を8月29日に開いた。賛同団体からの出席者も加わって「国葬」に反対する市民連絡会議をスタートさせ、①北海道、札幌市への要請行動②「国葬」当日の行動計画として札幌駅南口でのスタンディング集会の実施を決めた。

**道、札幌の「公費出張」に抗議**

活動は動き出した。先を急ごう。北海道札幌市への要請は講演会後の9月12日に行い、①公費による「国葬」出席の撤回②学校や庁舎での半旗掲揚、黙とうの指示を出さないこととの2点を、16日期限内に回答を求めた。(要請内容と回答は参考の1、2)。道知事への要請は記者会見で内容を説明して臨むこととし、それを知った北海道が対応に苦慮する素振りをつかがわせたり、札幌市では私たちに対応した副市長が「市長の公務」出席をその場で初めて明かす不思議な応答もあった。(別稿参照)

**別稿① 繰り返される「いずれにしましても」**

「いずれにしましても」。9月16日、私たちに対応した道職員の一人名は、このフレーズを何度繰り返しただろうか。

これに先立つ12日、私たち「国葬」に反対する市民連絡会議と戦争させない市民の風・北海道は連名で、北海道知事に①「公費」による「国葬」出席を撤回すること②半旗や黙とうなどの弔意強要につながる指示を学校はじめ関係機関に出さないこと―を要請していた。

この要請に対する返答を求めて出向いたのが16日。そして回答書(資料参考2)をみて驚いた。回答者に、道の最高責任者である「鈴木直道」の名前がないばかりか、回答書類を作成した「総合政策部知事室道政相談センター」の責任者名もない。まして「公費」出席する理由も、「私的」参列を検討した欠片もない。

これらを矢継ぎ早に尋ねる私たちの質問に、なぜか沈黙するセンター長に代わって、脇に控えた職員がオウム返しのように繰り返した。「いずれにしましても、知事は回答書の通り、公費出席する予定です」。まるで、議会答弁の予定稿を聞くようだった。

そして「国葬」当日、半旗を庁舎に掲げた道央のある町長は「一個人としては国葬に反



対」とわざわざ断ったうえで、「国が(国葬を)決めた以上、行政執行者として弔意を示す」と話していた(道新28日朝刊)。

「おかみ(国)には逆らえない」習性は、こうして作られるということか。

た真合に、ビルの谷間をこたませた。講演会や集会では、「戦争させない市民の風・北海道」の演奏グループ「ライブ隊」に参加を依頼し、会場の雰囲気大いに盛り上げてもらった。

必要なことは事実経過より、私たちがこの運動を通じて何を学んだかだろう。10月初めに開いた反省会ではZOOMながら活発な意見交換した(詳細は10日、「市民の風」メールに発信)。

**主体性 発揮で多様に**

私にとって刺激的だったのは、「27日は他の市民グループ・団体と連携して大掛かりなものにできればよかった」と私が話したところ、「いや、それぞれがやればいいこと。あちこち

**参考資料2：要請に対する北海道と札幌市からの回答(9月16日付)**

<北海道> ①について「国において、国の儀式として決定し、国葬儀委員長 岸田内閣総理大臣から、都道府県知事などに正式に案内があり、知事として公務で出席することとしたもの。なお、公務による行事はこれまでも公費で対応している。」②について「半旗の掲揚については、教育庁、市町村など他機関への要請は行わない。」このほか、道議会議長の出席を明かにしています。回答者は知事ではなく「総合政策部知事室道政相談センター」で、無署名でした。

<札幌市> ①については「安倍元首相の国葬につきましては、葬儀を執り行う国から国の儀式としての案内を受けた札幌市長が、市長の立場で公務として出席することから、公費で対応することとなります。／なお議長の出張については議会事務局の所管となります。／また、その他の職員は案内が来ておらず出席はありません。」②については「弔旗の掲揚などを実施するかどうかにつきましては現在検討しているところです。」札幌市の場合の回答は市長「秋元克広」でした。(山本)

**別稿② 国論2分より論議できる社会に**

「国葬」当日の27日、札幌駅南口で私たちが行った国葬反対のスタンディングを通りかかったスーツ姿の女性が、チラシを配布していた仲間にかんがりの剣幕で詰め寄ったという。「あなたたちが国論を2分しているのよ。世の中を悪くしているのはあなた方よ」と。共同通信社が「国葬」に前後した9月中旬と10月初めに行った全国電話世論調査は、興味深い数字を残した。「国葬」評価について否定派は10月が61・9%で9月より1・1ポイント増、肯定派は10月が36・9%で9月より、1・6ポイント減となっている。この傾向は他の世論調査でも同様と思われ、時間の推移とともに、「国葬」に疑問を持つ人々の増加を示している。

ということは、私たちがなじった女性は、この世論の推移に焦りを感じていたということだろう。

民主主義は賛成、反対はもとより多様な意見で成り立つ。異論を持つ人とも話し合える場を壊したのが「アベ政治」であるといつか気づいてくれるだろうか、と強く思った。

多発的にすれば効果的でもある」と即座に切り返されたことだ。市民としての主体性を尊重する新鮮な視点ではないか。

確かに、私は7月末から「市民の風」メールを捜して、道内各地の「国葬反対」の予定表を随時まとめていた。それは一端とはいえず、各地でいろんな動きがあるのを知るには十分だった。本格的に募れば、もっと数は多く内容も紹介できただろう。私たちの動きもその二つに過ぎない。しかし、こうした市民の活動の総和が、世論調査に表れているはずだ(別稿参照)。

市民の声が率直に反映する社会になってほしい。今さらながらの願いである。

山本伸夫(やまもと のぶお)  
フリーライター、元北海道新聞記者、山口県生まれ

# 小特集

## 「反国葬」から政治の転換へ歩みを進めよう

### 山口たか

7月8日、参議院選を二日後に控えて、その事件は起きた。安倍晋三元首相が奈良県で自民党候補の応援演説中、銃弾に倒れ亡くなった。旧統一教会の洗脳、霊感商法は、つとに有名であったが、オーム真理教以降、すっかり忘れていたなかでの襲撃事件。世界平和統一家庭連合と名称を変え、また活動をしていたこと、それに安倍氏が大きくかかわっていると報道されている。

昭和天皇逝去のさいは、大喪の礼が挙行された。天皇の重体の期間中、歌舞音曲の自粛、当日の休校など、疑問もあった。私は仲間たちと、葬儀当日、車の運行も自粛され静かになった札幌駅前通りで、ラジオたいそう（Ⅱ大喪）をして葬儀を皮肉った。それは皇室典範にそっておこなわれ、天皇制に反対だろうと賛成だろうと、法的に問題はなかった。

一方、「アベ国葬」はどうか。安倍政権の8年を私は全く評価しないが様々な意見があることからそれを別にしても、法的根拠がない上、弔意の強制Ⅱ内心の自由を奪つことにつながる国葬に反対の意思表示をしようと考えた。個人的には、以前から森友問題にはこだわり続けて

きた。学園の所在地大阪府豊中市での集会にも参加した。籠池夫妻を呼んで講演会を開催した時は札幌エルプラザホールが満席となった。森友問題を記事にしてNHKを辞めざるを得なかった相澤冬樹記者の講演会、安倍発言によって公文書改ざん、廃棄を強いられ自ら命を絶した元大阪国税局職員赤木俊夫さんの妻・雅子さんの講演会も行った。

真相を明らかにしないまま安倍は逝った。安倍の妻・昭恵氏は、「常に私を守ってくれた」と夫を偲んだ。ネットでは昭恵氏への同情があふれていたが私は許せなかった。たしかにあなたの夫はあなたを守った。ウソと公文書改ざんと公務員による忖度で。それは国民への背任、犯罪、政治の私物化。一人の公務員の命を奪つたことへの後悔や贖罪の気持ちはないのか！

たまたま、山本伸夫さんも同様なことを考えていたことがわかり、自分が所属している市民グループの会議も待ちきれず、有志で、「国葬に異議あり」行動を呼びかけ、水島朝穂氏講演会やスタンディングに取り組んだ。九州から北海道まで、反対の声は日に日に大きくなった。

自衛隊の儀仗兵に送られ遺骨は式場へ。途中防衛省前を通過、会場では甲砲19発が発射。菅首相による弔辞は、軍人勅諭や教育勅語を制定した山縣有朋の句が引用され、まさに軍国主義的、古色蒼然とした葬儀だった。反対運動は一旦終息した。

しかし、岸田首相は閣議決定で何でもできると思つたら大間違いだ。民主主義の否定、国会無視Ⅱ国民無視だ。葬儀強行で、国民の分断は一層拡大した。今回の運動でつながった全国の仲間と打倒岸田、打倒統一教会政党、の声をさらに大きな運動にしなければならぬ。

一方、岸田政権に代わる、政権の受け皿がないことは大きな問題だ。今の立憲野党に政権を託せないと感じている市民は多い。この現状をどうするか、統一自治体選挙なども通じて立憲野党を叱咤激励し、育て、このむごたらしい日本政治を変えたいと強く思う。野党共闘については、批判、提言もし、市民Ⅱ主権者の存在感を高めることも重要だ。反国葬運動が安倍政治の終わりの始まりを告げていると信じたい。

山口たか（やまぐちたか）  
札幌生まれ。三女一男の親。ベトナム反戦運動から、消費者運動、脱原発などに関わる。元札幌市議会議員。現在「市民自治を創る会」「戦争させない市民の風」共同代表。

# 活動報告

## インターンとして「遊」に参加してみよう

### ◆北海学園大学2年 太田瑞季（おおたみずき）

今回は約2ヶ月間という短い期間ではありましたが、事務作業・講座の準備からNPOではどのような活動を行っているのかを知ることができました。また遊さんの講座を通じてアイヌ民族の問題、再エネの環境問題など社会問題について自分が知らないことも多く大変勉強になりました。特に印象深かったのは再生エネルギーに関して地域住民の声を無視した理不尽な開発が多く行われている実態があるということ。このように興味深い内容の講義が多かった他に、講座を受けている方々それぞれが社会問題に対して考えを持っていて、物事の考え方に因って大変刺激になりました。



次に活動の一環としてこのインターン活動を提供して下さったNPO法人JP(ドット・ジエーピー)の未来国会というイベントに参加しました。この未来国会のプレゼンですが、結果としては惜しくも予選敗退となってしまいました。しかし、この発表を通じて自分の考えを多くの人に納得してもらつたためにはどう伝えれば良いのかを学ぶ貴重な経験になりました。

このような経験から自ら学ぶ事の大切さや考え方の違いから多角的な視点で考える力が身についたと思います。このような成長を自分の将来に活かせるように努力していきたいと考えます。

最後に、このような貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございます。

### ◆小樽商科大学2年 佐藤聖花（さとうきよか）

私がさつぽろ自由学校「遊」さんをインターン先に選んだ理由は、将来の夢が決まっていなかったからでした。こちらでは色々な問題について取り上げ知見を深めていると知り、何か自分にあつたものを見つけてきつかけになるかもしれないと思いました。実際に事務所に挨拶に行くとき小泉さんが暖かく迎えて下さり、安心したのを覚えています。その時にどんな講座を開いているのか、パンフレットを頂き拝見しました。法律の問題から健康に関するもの、再生可能エネルギーなどの社会問題など、多種多様な内容に驚きました。

お手伝いをさせて頂いたものは沢山ある業務の一部に過ぎないですが、それだけで、小泉さんが会員の皆様と関係を築きながら、ひとつ一つの活動も大切になさっているのが伝わってきました。それが顕著に現れていると思ったのは、名前を見ただけでどの講座を受講された方なのかなどの情報が出てきたところです。このことがインターン活動の中で印象的な出来事の一つとして記憶に残っています。また受講もさせて頂いたとき、学びを得ることもできました。それと同時に自分にあつたもの、興味のわくものを見つけたという私の目標も達成できました。今後は法律関係の勉強に勤しみます。さつぽろ自由学校「遊」という、素敵な学びの場でインターンをさせて頂けて本当に感謝しております。





活動報告

あどぼのプラットフォーム会議2022 北海道開催

中根翔子

2022年4月より、NPO法人泉京・垂井で勤務しています。昨年度までは違う仕事をしており、NPOで活動することははじめてです。活動する中で、丁寧に声を聞き届ける「アドボカシー」の重要性を実感しています。

あどぼのプラットフォーム会議とは

「あどぼの学校」は日本の民主主義の精度を上げていこうと「アドボカシー活動（政策提言・世論喚起）」の担い手を増やしていくために2015年に京都で誕生しました。2015年度は京都で、2016年度は名古屋で、2017年度は岐阜で、それぞれの地域特性を活かした講座を展開してきました。そして2018年度以降は、「あどぼの学校」の3年間で培われてきた地域を超えてのネットワークを継続し、多彩な人材育成事業を展開しながら、久留米や札幌など、新しい地域への展開も進めてきました。また、昨年度からは「あどぼを紡ぐ研究会」を開催し、アドボカシーの記録作成と世代を超えた継承に取り組み始めました。

この間、一緒に活動してきた全国各地の方だけでなく、新たに「あどぼを紡ぐ研究会」で一緒に活動してきた方々も交えて、対面で集う場として、「あどぼのプラットフォーム会議2022」を北海道・札幌で開催しました。

あどぼのプラットフォーム会議 1日目 7月30日(土)

これまでオンラインを通してお話してきましたが、対面では初めてお会いしたので、ゆっくりと自己紹介からはじまりました。30名以上の全国各地でさまざまな活動をされている方のとても濃い自己紹介から、アドボカシーに関わって多様な活動の仕方があると学ぶことができました。

発題1 「あどぼの学校」の誕生からここまで」では、これまでのあどぼの学校の経緯や、昨年度私自身も参加した、あどぼを紡ぐ研究会の開催目的など、アドボカシーを学ぶ意味を再認識することができる時間となりました。

発題2では、「あどぼの学校」各地（京都、岐阜、名古屋）での展開、「あどぼのスコ



分があるのです、今後も情報交換を継続し、協働体制を作っていきたいです。

に取り組む人は「代弁者」の立場ですが、代弁者に、やがて当事者でもある場合が起こりうる中で、自分自身の立ち位置を自覚して取り組む必要性を感じました。とても大切な問いを改めて考えることができる場となりました。

あどぼのプラットフォーム会議 2日目 7月31日(日)

2日目はより具体的な話し合いを行いました。「あどぼの学校」の現在や「あどぼを紡ぐ研究会」初年度の振り返り、「あどぼの学校」のこれから、「あどぼを紡ぐ研究会」2年目の詳細検討についてです。今年度のあどぼを紡ぐ研究会は2年目になり、環境分野という活動の幅が広く、歴史もあるテーマを扱い、3年目のテーマは「ポストSDGs」。テーマに対して、どのようなお話を誰に何つつのか、構成についてなど活発に話し合われています。

また、各地の運動の共有と協働展開について、PP21フォーアアップ+世界社会フォーラム、SDGs市民社会ネットワーク、開発教育協会、PARC50周年からそれぞれの取り組みについて伺いましたが、あどぼのプラットフォーム会議の活動目的と共通する部



二風谷ツアー 8月1日(月)

3日目はオプショナルツアーとして二風谷を訪問しました。ただ訪問するだけではな

く、アイヌの貝澤耕一さんや萱野志朗さん、木村三夫さんのお話を伺うことができました。ダム開発や和人による北海道の開拓の話などアイヌの方にとって大切な自然や土地が奪われていく悔しさや憤りは計り知れなかったと思います。今現在も研究目的で遺骨を奪うなどあつてはならないことが現実として起こっており、私たちは知るべきだし、伝えて行かなければいけないと思いました。あどぼを紡ぐ研究会の中でも先住民に関するお話を取り上げていきたいののではないかと思いました。訪問して学ばせていただいたことを活かしていきたいです。

この3日間で、全国各地で多様な活動を積極的にされている方々とながらることができ、アドボカシーについてともに学ぶことができるあどぼを紡ぐ研究会の意義を再確認することができました。2年目のテーマ「環境」についての研究会がスタートしていますが、札幌で出会った皆様と一緒に先人たちから学び、日々の活動に活かしていきたいです。

中根翔子（なかねしょうこ）

NPO法人泉京・垂井事務局

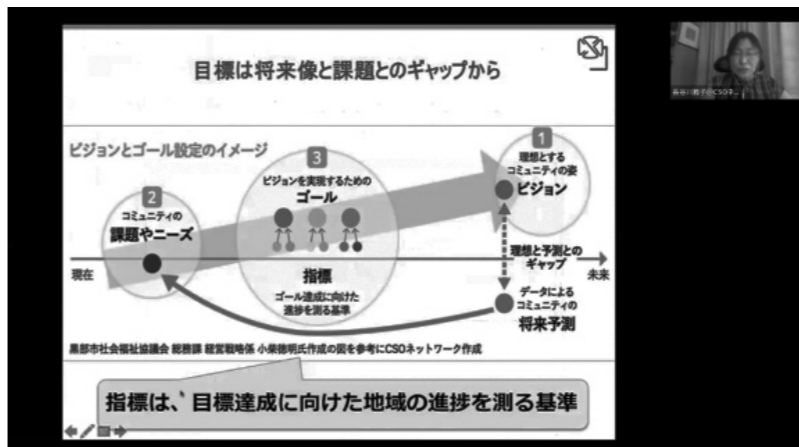
活動報告

北海道メジャーグループ・プロジェクト2022  
キックオフ報告

小路楓

2022年で、北海道メジャーグループ・プロジェクトは3年目を迎えました。昨年末では国連75周年の問いに沿ってシナリオプランニングを学んだりしながら対話を続けてきました。今年もSDGs市民社会ネットワークによる地域SDGs指標プロジェクト助成を受け、SDGs指標を作ることを目標に進めることとなりました。正しい、適切な指標を作るということに必ずしも注力するのではなく、指標づくりを通して自分たちの現状と未来を考えることを大事にするものです。

社会には既にデータのあることやまだデータが存在しないこと、調査のしようがないこと、当事者にしか気づかないことなど様々な事柄があります。そうしたことから2〜3個程度、当事者同士の対話（グループミーティング）



を通して指標を作成します。今年からやり方が変わるのでプロジェクトメンバーで何度も話し合い、スタートしました。「指標づくりについて具体的にどんな感じ？」指標づくりに意義を感じる一方で、具体性が持てない部分がありました。そこで7月23日にキックオフミーティングを行い、その不安を埋めることにしました。

講演を踏まえ、小グループに分かれて「このままではまずい！と感じる地域の課題は？」「どんな指標があれば課題の解決・改善を図ることができるだろうか？」の2つの問いについて意見交換しました。

正直なところ、これまで事務局として動いてきたなかなか孤独でした。これまでにない規模の珍しいプロジェクトをやってみて、果たしてうまく進められているのだろうか、これで良いのだろうかと考えても答えが出ない。今回のキックオフミーティングは決してそれを解決してくれるものではありませんが、同じように悩みながらプロジェクトを進めている人がいるということがわかり、何かあったら相談できるつながりができたことは大きな収穫でした。講演のおかげでプロジェクト参加メンバーもSDGs指標について理解でき、これからのどんなグループミーティングをやっていけばよいか道筋が見えたようでした。プロジェクトから発信される中で一番大きなインパクトがあるのは年度末の全体ミーティングです。これからグループミーティングを各自走り抜けることでしょう。

小路楓（しょうじかえで）  
EPO北海道／北海道地方ESD活動センター職員



原田 公久枝  
第3回

姉が中卒で就職したのは帯広であれば知らない人はいないであろう菓子店の箱を作っている町工場で寮に入った。一週間経って心配した母が寮に電話すると、電話口に出た姉が「すみませんすみません本当にすみません」と謝りながら泣くばかりで、驚いて迎えに行った母が何を聞いても「すみませんすみません生まれてきてすみません」「ごめんなさいごめんなさい」と謝り泣くので、そのまま家に連れ帰ったが家に帰ってもただ謝るか、突然「ひいひい!!ごめんなさい!!」

と叫ぶか、ブツブツ口の中で謝っている日が続く、四日位経って落ち着いた時に話を聞くと、仕事でだろうが寮の食事時間だろうが寝る前だろうが、社長のお母さんが姉を呼びつけて、自分は椅子に腰掛けておいて姉を地べたに正座させて「うちは誰でも知っている大手の菓子店の箱を任されている一流企業だよ！なんでアンタみたいなアイヌが紛れ込

んだんだか!!」「うちを馬鹿にしてるんでしょうが！アイヌのくせにうちみたいな一流企業に入りたいたなんて！とんでもないことだよ!!」「なーにが悲しくて！アイヌなんかを！うちが！雇わなきゃなんないのさ！本っ当に腹が立つ!!」と汚いから触りたくないからって1mの竹尺で叩きながら罵詈雑言を浴びせ続けて、長いときは二時間とか、しかも一日に何回もやられて、口ごたえをしようものなら、狂ったように怒り出して長くするので、とにかく土下座して謝っていたという。

アルバイト情報誌を買って、この会社に行きたいと電話して面接の約束して、その日にその会社のドアを開けて「失礼しまー...」と言いつつ終わらない内に「何だ！アイヌか！雇うわけねーべや！帰れ！」父母も祖父母もアイヌである私の弟が今現在浴びせられる言葉だ。

私が頼まれる講演や原稿はほぼ「きくちゃんの日々」思っていること、感じていること、ありのままに話してほしい」と言われるので、アイヌである私の体験を身近な人の例も出してわかりやすく話すとまあまあ割合で「アイヌの方々が今もそんなにヒドイ差別を受けてるなんて知りませんでした。それで質問なんです、アイヌの方々は今何を求めて

いるんですか？」と言ってくる人がいる。私の話聞いてなかったのかな？と思いつつながら「何だろ？私がこうしたい！って言ったならアナはその通りにしてくれるのかな？」ってちょっと嫌味を言うてから「話した通りアイヌはアイヌってだけでマイナなんだと思います。アイヌもプラスマイナスゼロから始めさせてもらいたいです。アナタたちと呼ばれる日本人が持っているものをアイヌにも持たせて欲しい。ただそれだけ」と答えませんが、ほとんどの質問者はキョトンとしています。元々特権を持っている人は、持ってなかったことが無いから持っていない状態を知りません。だから持っていない人の気持ちもわからならしいです。私の姉や弟のことも私の体験もこの国で起きていることなのに、質問者には何処か遠い自分の住んでいるところとは関係無い話だと思っているから、そんな質問が出来るんでしょう。

それを持たざる者（アイヌ）に考えさせないでアナタたちに考えて欲しい。

原田公久枝（はらだきくえ）  
札幌在住。18才年上の旦那有り。子供なし。集金と配達のパートをしながら、アイヌの活動（歌・踊り・講演・執筆・お笑い等）をしている54歳です。

第九〇回 世界遺産の集落から

九月、三年ぶりに奄美大島へ行った。奄美は、徳之島、沖繩本島のやんばる、それに西表島と合わせて、昨年、世界自然遺産に登録された。その世界自然遺産のエリアのすぐそばにある西仲間という集落に通い、継続して話を聞いている。今回は短い滞在だったけれど、六名の方に合計十四時間のとても濃密な聞き取りを行なうことができた。私たちが聞くのは、主にその人の生活史。中でも、地域の自然とのかかわり、それに生業だ。

今回お話を聞いた最高齢は、九二歳の作田キヨ子さん。作田さんにはこれまで合計四回も聞いているから、もう聞くことはないかも、と思っただら、とんでもない、とどんでん話が出てくる。九〇年も生きていたのだから当たり前かもしれないけれど、ほんとうに話の泉だ。

作田さんは、この西仲間集落で生まれ、九十年間、ずっとここで生活してきた。若いとき、外に出たいと思っ、友だちのお母さんの紹介で、名瀬（奄美大島の中心地）の薬局に



働きに出たが、わずか一週間で親に連れ戻された。当時の奄美ではまだ稲作が盛んに行なわれていて（現在はほぼ消滅）、作田さんは両親と一緒に田んぼの仕事に励んだ。田んぼでは、竹（奄美でブラデーとよばれるマダケ）を細かくして田んぼの肥料していた。田植えや稲刈りは、ユイタバ（結束）と呼ばれる共同作業で行なわれた。集落には川からの用水がはりめぐらされ、そこから田んぼに水がそそがれていた。「用水路ではイモや野菜も洗っていましたね」。用水は同時に、サトウキビから砂糖をしぼるサタヤドリ（製糖小屋）の水車にも水を供給していた。サトウキビ栽培は奄美大島の主要産業だったが、西仲間では稲作よりも前に消滅した。

作田さんは、一九七八年から、農業との兼業で、コンクリート製品製造会社にも働きに出た。さらには一九八五年ごろ、みかん栽培も新規に始めた。みかん栽培は、当時政策的に推奨されたものである。一六年働いた会社をやめたあとは、農業一本となった。そして九二歳の今も、毎日畑に出

ている。「毎年毎年の作物を作ることはやめません。とにかく家にじっとしているのが嫌いなんです。あまり多くはできないけれど、少しずつやればいいと思っています。農作業が大好きだから」。何年か前までは島っつきよの塩漬けを名瀬の青果市場に出していた。

作田さんの歴史は、奄美の歴史だ。世界遺産を反映したものであってほしいと思っ。作田さんに続してお話しを聞いた別の女性は、山仕事を長くしてきた人だったが、はつきりと「世界遺産は好きではない」と語った。作田さんは今でも、畑に入るときは、両親の教えに従って、「とががなし、とががなし」「尊い、ありがたい」の意と拝んでから入る。人びとの生活と自然保護とをどう結びつけていけばよいだろうか。その一助になるかどうかわからないが、作田さんたち西仲間の人びとの生活誌を冊子にして残そうと考えている。

宮内泰介（みやうちたいすけ）  
1961年生まれ。さっぽろ自由学校「遊」共同代表。北海道大学教員（環境社会学）。ソロモン諸島、北海道、宮城などで、環境、生活の調査中。

リレーエッセイ 私と、さっぽろ自由学校「遊」 第三回

会員 横田恒一

『遊』を知るきっかけは、洞爺湖サミットの前年から開催されためた市民サミットなどのフォーラムに参加して、こんな集まりが毎年あればいいなと思っていた時に、山口二郎先生の時計台フォーラムで『遊』の講座案内を買ったことです。市民科学者として興味を持っていた、高木仁三郎さんや宇井純さんを取り上げた「市民の学問、民の思想」講座が目にとまりました。『遊』では自分で講座企画ができることに惹かれ、会員になり、興味を持っていた、北欧の福祉、地域通貨、日本の税制・財政、プロボノ、マンシオン管理と大規模修繕、など雑駁な講座を幾つか企画・開催してきました。講座を企画する中で、講師の方はもとより、受講者の方々との情報交換などとても刺激を頂いてきました。

『遊』の会員になったところに、社会人も1年間受講できる北大の「科学技術コミュニケーションータ養成講座(Costep)」を受講し、講師陣の中に宮内泰介さんなど『遊』に縁のある方がいらっしやあって『遊』の幅広さに驚きました。『遊』やCostepを通して、様々な方とお会いし、話を聞くことを学びました。

『遊』の講座を1回きり、教室に参加できた方だけではなく、もつと共有できないか、残しておけないか、と考え、講座の文字起こしを始めました。受講した講座を中心に30を超える講座



の文字起こしをして、簡単な冊子を作りました。公開するには講師の了解や校正依頼などハードルもあり、今のところ事務所の本棚に並べてあります。パソコン操作や冊子の作り方なども含めて、文字起こし講座を企画すると、意外と興味を持った方が何人も参加してくれました。最近では耳の聞こえや、キー入力等の指の反応が悪くなり、中断しています。講座で聞くだけではなく、後から改めて読み直す」と『遊』の講座の先取り感に驚きます。

『遊』の会員や受講者が増えず、若い方の参加が少ないのが残念です。『遊』の名前は知っているけど、受講したことないんだよね」という方が居て、『遊』の教室に足を踏み入れる敷居をできるだけ低くできないかと思ひ、Facebookへの講座案内の投稿を担当しています。時折、受講の感想も投稿し、「へー、こんなことやっているのか」と気軽に興味を持って覗いてもらうきっかけになれば良いなと思っています。

IT業界に居たこともあり、以前から遠隔地からの講座受講ができませんが、など気になっていました。このコロナ禍で、ITには縁遠そうな『遊』の事務局や受講者が、オンライン講座をスムーズに実現できて、教室の外からの講師や受講者が増えていくという、瓢箪から駒、災い転じて福と為す、のように最先端に追い付けそうです。『遊』の進化は止まらないですね。

「ゆうひろば」の編集に参加させていただくことになりました理事の依屋です。Zoomによる遊「日曜サロン」の進行役も務めさせていただきます。

1997年に遊の最初のホームページを作成して以来、諸刃の剣であるテクノロジーのプラスの面を、市民運動に生かしていくために、活動しています。ここ9年間はVRを中心とした多様なテクノロジーの歴史と現状を解説する講座を続けてきました。最近、SDGsの促進とテクノロジー活用の循環について講座を企画しています。

2022年後期講座では、ボランティア団体「VRアートを楽しむ会」の企画として、来年3月に「VRアート入門講座」を開きます。VRはとても幅広い可能性を持っていますが、アートとしての活用に関心を当て、VRアートの歴史や現状について説明します。オンラインの講座です。

10月22、23日には札幌地下歩行空間（チカホ）の北2条広場で、「VRアート祭」を開きました。20人のVRアーティストの作品を紹介し、希望する作品の中に入れて自由に動き回れる体験です。そして空中に絵が描ける制作体験も行いました。12月17、18日には札幌コンベンションセンターでも「VRアート祭」を開く予定です。（依屋年彦）

## 事務局だより



## さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

### 教室開催講座（2022年11～12月開講分）

（会場記載のないものは愛生館ビル5F 501会議室にて）



#### 老いと向き合う part 8

- ② 11/4 (金) 14:00～ 映画「PLAN75」から考える ★細谷洋子
- ③ 12/2 (金) 14:00～ 日本の自然葬と米国の還元葬 ★依屋年彦

#### 花さんの読書ゼミ 新著『生きる場の思想と詩の日々』を読む ★チューター 花崎皋平

- ⑦ 11/10 (木) 14:00～
- ⑧ 12/8 (木) 14:00～

#### IT勉強会 ★コーディネーター くらだとしひこ ② 11/11 (金) 18:45～ ③ 12/9 (金) 18:45～

#### 北海道の問題から地球と共生の未来を考える part 2

- ② 11/12 (土) 14:00～ 札幌オリンピックを止めよう ★江沢正雄
- ③ 12/17 (土) 14:00～ 北海道の自然を様々な角度から考える ★佐々木邦夫（会場：6F愛生館サロン）

#### 「遊」版うたごえ喫茶 2022 於：愛生館サロン（愛生館ビル6F南側奥）

- ② 11/18 (金) 14:00～
- ③ 12/16 (金) 14:00～

#### 読書室 よりみちまわりみち ② 11/19 (土) 14:00～ ③ 12/17 (土) 14:00～

#### アイヌアートデザイン教室 ★講師 貝澤珠美 毎月第二・第四水曜 13:00～

### アイヌ森川海プロジェクト始動！

このプロジェクトは、アイヌ民族が元々持っていた森・川・海などの自然との関わりや、それを制限し変化を余儀なくさせた政策や開発行為について文献や聞き取りを通して調べ、その成果を可視化し、発信することでアイヌの権利回復に貢献しようというプロジェクトです。今年5月より正式にスタートしました。以下専用のウェブサイトです。随時情報を更新していく予定ですので、チェックしてみてください。

森・川・海のアイヌ先住権を「可視化」する <http://kimpetatuy.org/>



## さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

### 会場&オンライン併用講座（2022年11～12月開講分）

（会場記載のないものは愛生館ビル5F 501会議室にて）



講座のお申込は、  
<https://ssl.form-mailer.jp/fms/b5340b4c756060>  
より申込フォームにご記入のうえ、送信ください。



#### ミュニシパリズム（地域自治主義）

- ① 11/3 (木・祝) 14:00～ 市民の力で政治を変える—杉並区長選に学ぶ ★内田聖子
- ② 11/18 (金) 18:45～ 水道再公営化とコモン・コミュニティの再生 ★コーディネーター・チーム
- ③ 12/16 (金) 18:45～ 連帯経済とは？—フェアトレード運動等を通して考える ★平野研

#### ウクライナ基礎講座

- ② 11/8 (火) 18:45～ ウクライナの言語、民族、宗教、文化、教育など ★クラコフ・ペロニカ
- ③ 12/13 (火) 18:45～ ウクライナの歴史① ★ゴヴォロヴスキー・セルヒー

#### 20世紀を切り開いたアイヌ列伝 part2

- ② 11/9 (水) 18:45～ 知里幸恵と出逢って演じて感じたこと ★舞香
- ③ 12/14 (水) 18:45～ 山本多助工カシが切り拓いたこと ★竹内渉

#### 越境する人と文化を通して読み解く東アジア IV ★講師 朴仁哲

- ② 11/15 (火) 18:45～ 韓半島の咸鏡道を事例として
- ③ 12/20 (火) 18:45～ 中国の吉林省を事例として

#### ウクライナ戦争と日本の安全保障—憲法9条の平和主義を改めて考える

- ② 11/16 (水) 18:45～ 自民党の改憲案を考える ★神保大地
- ③ 12/21 (水) 18:45～ 台湾有事と南西諸島 ★許仁碩、渡名喜隆子

#### このままでいいの？ 再生可能エネルギーの進め方 part11

- ② 11/17 (木) 18:45～ 宮城県丸森町メガソーラー開発事業の実態と住民運動について ★義高光
- ③ 12/15 (木) 18:45～ 北海道伊達市山間部での風車建設問題 生の声を聞く ★宇井尚、佐々木邦夫

#### 簡単健康講座—五臓六腑の五臓を学ぶ。東洋医学でお手軽養生！ ★講師 堀口恭弘

- ② 11/24 (木) 18:30～ 將軍の官「肝」とは
- ③ 12/22 (木) 18:30～ 君主の官「心」とは

#### 北海道の「核のゴミ」処分問題を考える part 3

- ② 11/26 (土) 13:30～ 脱原発・核ゴミ調査反対運動と廃炉後の地域づくり ★佐藤英行
- ③ 12/23 (金) 18:45～ 「原子力カマナー」に依存しない地域振興プランづくり ★小田清

#### 動物福祉の名著『アニマル・マシーン』を読む ★コーディネーター 滝川康治

- ② 11/26 (土) 13:30～
- ③ 12/24 (土) 13:30～

#### 日本の少子化と子育てを考える—ネウボラから探る子育て支援の課題と未来

- ② 11/30 (水) 18:45～ 北海道における少子化問題 ★丸山洋平
- ③ 12/28 (水) 18:45～ 子育て支援事業の変遷とコロナ禍後の子育て ★工藤遥

#### カール・マルクス著『資本論』を読む ★チューター 宮田和保

- ① 12/7 (水) 18:45～

#### 出会う英語 ☆英語で語ろう☆ ★講師 アンドレス・パトリシアン 毎月第二・第四水曜 19:00～





## さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

### オンライン講座 (2022年11～12月開講分)



講座のお申込は、  
<https://ssl.form-mailer.jp/fms/b5340b4c756060>  
 より申込フォームにご記入のうえ、送信ください。



#### 遠くて近くて遠い ニューゼalandとオーストラリア

- ② 11/1 (火) 19:00～ 障害者の生活から見てくるニューゼalandの福祉と政治 ★安積宇宙
- ③ 12/6 (火) 19:00～ アボリジニの歴史と市民権運動 ★高嶺司

#### ベーシックインカムを再考する —生活保障と脱成長との関係から

- ② 11/4 (金) 19:00～ コミュニズムのコモンとしてのベーシックインカムの可能性 ★樋口浩義
- ③ 12/2 (金) 19:00～ ベーシックインカムと社会保障 ★山中鹿次

#### 人と動物との共存・共生をめざして

- ② 11/10 (木) 19:00～ 絶滅の危機に瀕するマゲシカ問題 ★立澤史郎
- ③ 12/8 (木) 18:45～ 絶滅の危機に瀕した猛禽類と共生するために ★齊藤慶輔

#### 英国からの報告 —自然と福祉を優先にした「新しい経済」 ★講師 大崎美佳

- ② 11/26 (土) 19:00～ 成長を超えて
- ③ 12/17 (土) 19:00～ シューマツハカレッジでの暮らし

#### 先住民族の森川海に関する権利 —海外の事例から

- ② 11/21 (月) 19:00～ アオテアロア・ニューゼalandの先住民族マオリの漁業権 ★深山直子
- ③ 12/19 (月) 19:00～ マレーシアにおける森林開発と先住民族の権利 ★内藤大輔

#### SDGs「私たちの声を、地域に」—当事者からみた地域の課題と政策

- ② 11/22 (火) 19:00～ 若者の立場から ★長谷川友子
- ③ 12/27 (火) 19:00～ 農民の立場から ★荒谷明子

#### タシハンボン / もういちど ハングル ★講師 コ・ソンギョン 毎月第二・第四木曜 19:00～

#### 編集後記

収まらないコロナ禍の中、「遊」でもオンラインを多用していますが、会場に来る参加者が限定されがちになってます。遠くの方はオンラインで、近場の方はぜひ教室にも足を運んでみてください。(こ)

いつだって No Nuke !

北海道のエネルギーの未来を考える  
10,000人の会

オーガニック・自然食品専門店

らる畑

おべんとうとおそうざい

らるごはん

札幌市中央区大通西23丁目  
Tel 614-2406 Fax 614-3836  
<http://rarubatake.com>  
10時～19時(日～17時・祝～18時)

ゆうひろば

発行：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目 愛生館ビル5F 501

・郵便振替口座： 02780-5-47036 (名義：自由学校「遊」)

・TEL:011-252-6752

・FAX:011-252-6751

・syu@sapporoyu.org

・<http://www.sapporoyu.org>



web サイト



F B ページ